

## 富士紀行(70) 古道を歩き、町内を歩こう！

(H13/5/22 記)

当富士紀行も遂に70号を迎えた。駄文・雑文をよくも書いたものだと、我ながら驚いている。付き合っている方は更に大変かな？

先日、天気の良いさに誘われて、須走の中をメモ帳片手に歩いた。まず、「小鳥の音楽堂跡」、小鳥の音楽堂とは何と優雅で、魅惑的な響きであろうか。須走中学校裏山の立山の中腹に広がる別荘地帯の一角にある筈だと、地図を頼りに周辺を歩いたが、残念ながら発見するに至らなかった。確認したところでは、従前のもものは朽ち果てており、概ね同じ場所に現在建築中である由。六角堂となっており、中に入って小鳥の囀りを楽しむようになるという。

滝不動が総合グランド脇の精進川への降り口（滝道への進入路）から少し入った林の中にある。不動明王が祀られているほか、数体の脇侍（不動明王の脇侍は仏典では二童子又は八大童子と規定されているが、置かれているのがそれに該当するのかどうかは浅学の身には不明）が安置され、燭台が置かれていた。時折、誰かがお参りするのであろうか。その名残のお賽銭が数枚。仏教では不動明王は、大日如来の使者であり、如来の命を受けて忿怒の相を表し、密教の修行者を守護して諸種の障害を取り除き、摩衆を滅ぼして修行を成就させる役割を負うとされている。鎌倉往還から滝不動までの修行のための道が「滝道」であり、「たき道」と刻された石碑が富士見通りの町営富士見ヶ丘住宅の入り口に立っている。

馬頭観音は、馬頭を頂く形像と六観音信仰で、畜生道を救うとされるその性格から、民間における馬の守護神として崇敬されるようになった。特に路傍に残る馬頭観音の石像はその場所に倒れた馬の冥福と共に、往来の馬が同じ災いに遭わぬように祈るものである。須走宿は富士登山で賑わい、交易で殷賑を極めたので、馬が主たる交通機関であり、馬は非常に大事にされたはずである。嘗ては、鎌倉往還であった須走交番の近くに馬頭観音が建立されていたのであろうが、現在は「馬頭観音の碑」という石碑のみである。浅間神社近くの交差点近くにもあったそうであり、これらを含む7体の馬頭観音が、須走町内の杉山精肉店の裏手に、富士白滝観世音（観音堂）として残されている。交代でお世話をしているという。4月18日が祭日とのことである。明治期の廃仏毀釈を避けるために、この地に集められたのであろうか。

「馬頭観音の碑」の道路を挟んだ向かい側に東海道400年祭記念事業の一環である道標が新たに建てられている。「鎌倉往還」とある。籠坂峠を経て、須走町内を抜けた鎌倉往還は、NTT須走交換所横から発電所跡とおぼしきあたりを通過して精進川を越えて、

ローソン東富士ゲストハウス近くで138号線の側道と交差する1km未満、幅2m程度の古道である。ゲストハウス近くには一本樫が聳えている。今は使われることのない、知る人として数少ない古道であるが、この道を通って富士講の信者や時には駿河や甲斐の武士達が、はたまた甲斐・駿河間の交易のために行き交う人馬や荷駄が往来したのだ。危険な道ではないので、往時に思いを馳せながら、暫し歩いてみてはどうだろうか。

須走交差点、スナック〇〇の前には、道祖神がある。これは下本宿有志により再建されたものである。地元の人々は、サイノカミ（賽の神）と呼んでいるから間違いなく道祖神である。サイノカミ又はサエノカミ、ドウロクジン（道陸神）等とも呼ばれる道祖神は、村の境域に置かれて外部から侵入する邪霊、悪鬼、疫神などを遮ったり、跳ね返そうとする民族神である。鎌倉往還の須走宿籠坂方面からと御殿場方面からの入り口に置かれていたものが、浅間神社の前と須走交差点に未だにひっそりと残されている。道祖神は古くから、道先案内者である猿田彦をはじめ境に祀られることが多い地蔵、庚申、荒神、地神、子安神等と習合して複雑な信仰形態を持つに至ったと言われている。須走の道祖神はヤチマタの彦とヤチマタの姫だと言われている。

土地の古老の記憶によれば、所謂どんど焼き（サイト焼き）の時には、それぞれの道祖神を広場に安置し、上本宿と下本宿のどんど焼きの燃え方を競ったという。この火競べの計画・実行は中学2年生を頭にして行ったそうである。中学2年生と言えば数えて、昔ならば元服すべき年であり、一人前になるための修行をも兼ねていたのだろうか。（先般、帰省したときに小学校の恩師と話したときに小生がの卒業した中学校では、中学校2年生になると大志式を行うとのことであったが、これは元服の儀を模したものであるとのことであった。）言うまでもなく、現在ではこのような危険な競争は出来ない。どんど焼きも消防車が配置され管理下の「どんど焼き」である。

（参考：各種辞典、須走在住の方からの庶務幹部照井3尉の聞き取りによる。）